

第 68 回大腸癌研究会

「括約筋切除を伴う肛門温存手術の妥当性」研究班報告

日時:2008 年1月 24 日(木)

ISR,ESR の Biological results は同時期に施行された APR と比較して差が無く、本術式の妥当性はすでに証明されている。昨年秋に、独自の QOL 調査票の各班員施設からの回収を終了し、各術式の QOL からみた妥当性の解析を開始している。

まず、今回使用した調査票の妥当性を検討するため下記のごとき検討を行いほぼ良好な結果が得られた。

「Fecal incontinence quality of life (FIQL)をベースにした肛門機能尺度の開発」

今回 FIQL29項目をベースに、漏便の程度、頻度などとは独立させ、生活影響を測定することに特化したものとして項目を整理し、就寝時について項目を追加し14項目とした肛門機能尺度(m-FIQL)を開発した。その尺度の検討

(対象)2000年から7施設で施行されたISR・ESR症例の内、アンケート回答があった152人

(方法)①回答率の確認 ②信頼性の計算 ③判別妥当性(肛門機能によるスコアの比較) ④並行妥当性(SF36との相関)

(結果)①回答率は14項目で91%

②信頼性は0.955(14項目すべて有効)とオリジナルと同程度の信頼性であった。

③判別妥当性は肛門機能の度合いに応じて有意なトレンドが確認された。

④SF36との相関は

- ・身体的役割制限 -0.625
- ・情緒的役割制限 -0.593
- ・社会的機能 -0.726
- ・こころの健康 -0.526

と負の相関を認め米国先行研究と同等の結果であった。

(まとめ)

- ・FIQLをもとに作成したm-FIQLは信頼性・妥当性ともに、オリジナルとほぼ同等の結果を示した。
- ・今後、ストーマ閉鎖の時期、術後月数、性別、社会的役割などを考慮しつつ、術式間での比較を行う予定である
- ・さらにQOLに影響する因子を抽出し、縦断研究への準備を進めたい